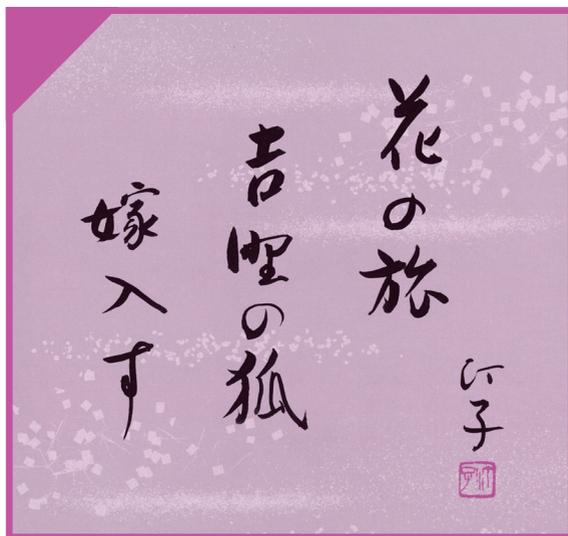


# 詠 詠 集

七月号



# 花鳥諷詠<sup>®</sup>

令和4年7月 ■ 第412号 ————— 目次



<b>花鳥諷詠選集</b> .....	木村 享史 ..... 2
	持永真理子 ..... 4
虚子研究 虚子宛書簡を読む (三十六)	
明治二十五年九月十一日 虚子宛池内政忠書簡 (封書)	
.....	小林 祐代 ..... 7
虚子研究 『六百五十句』 研究 (29) .....	11
一頁の鑑賞.....	日置 正樹 .....16
	椋 麻里子 .....17
この人の作品 .....	鈴木 風虎 .....18
虚子を語る 中杉隆世氏 .....	19
風報 .....	26
新刊紹介 .....	28
地区行事開催日程表 .....	31
編集後記 .....	32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

# 花鳥諷詠選集

木村享史 選

## 特選五句

偲びつつ花の浄土へ合掌す

朝倉井手 ちくの

冴返る戦禍の子等を悼む日々

宇佐尾崎 陽子

全身を映して選ぶ夏帽子

熊本隈部 輝子

帰りには賞状抱へ風光る

鹿児島 徳永 春乃

先生と一緒に花を見たかつた

白山辰 巴 葉流

## 二句短評

一句目——三月一日の新聞を見て日本中が泣いた。汀子先生、思えば満開の花のようなお人であった。

毎年吉野に、花を求め花に埋もれる日を必ずお持ちになった。偲びつつ浄土安かれと祈る、哀惜。

二句目——北辺の国で始まった途方もなく理不尽な侵攻、無辜の市民の命が理由もなく奪われてゆく。

テレビで報じられる幼な達の命の果敢無さ、胸に迫る思いは作者もまた戦争を経験した人なのか、痛恨。

## 入選六十句

太き鯉大きく跳ねて水温む 小平 青木美代子

うららかやまた海岸に来てしまふ 大分 野村香代子

野の色を育ててをりし春の雨 福岡 馬場 紀子

白き風わたり街中こぶし咲く 八王子 小町谷滋子

散策はいつもこの丘花ミモザ 町田 坂下 洋子

耕して土の匂ひを新たにす 札幌 菅原ツヤ子

けぶらせて少し焦して目刺焼く 高槻 林 曜子

二日酔てふは知らねど蜆汁 徳島 吉田 有子

泡一つ消え一つ生れ春の川 姫路 黒田千賀子

師を偲ぶ桜隠しや吉野線 松原 加藤 あや

初桜母と同時に見つけたる 西予 三瀬 教世

幹なでて手押車の花見かな 金沢 荒谷みえ子

受験子の声はれやかに帰宅かな 高知 前田まこと

風光る花嫁舟のすべりゆく 大牟田 石橋 武子

一丁目一番地より地虫出づ 泉大津 多田羅紀子

糸桜風のもつれを風の解く 福山 貝原 玲子  
 行く春を惜しみ逝かれし人惜む 福知山 松山 牧子  
 聖五月汀子の白いネツクレス 仙台 赤間 学  
 有終は風に委ねて飛花落花 神戸 光山 恵子  
 真つ直ぐに愚直に生きて昭和の日 高松 池田 裕子  
 げんげ田の広がる里や牛の啼く 鳥取 中前 惇子  
 桜餅提げて水上バスを待つ 東京 柏木佐智子  
 雨読とはこんな日のこと寒の内 松江 小村 四温  
 仲直りするも頃合水温む 福岡 下原口允子  
 咲き満つる花のたましひ仰ぎけり 吹田 小井川和子  
 日輪のかから散らばる黄水仙 福山 嶋山 洋子  
 生き生きと雨に色置く落椿 高松 渡部 全子  
 大空に映ゆる桜や孫生まる 高松 静川あさえ  
 一陣の風を描いて散る桜 横浜 工藤喜美子  
 どの色も翳は持たざるチューリップ 神戸 池田雅かず

木蓮に雨の暗さのなかりけり 尾鷲 若林 柗矢  
 桜餅買うて夕焼けだんだん坂 武蔵村山 福留 和江  
 順々に咲いて四月の庭となる 京都 山崎 貴子  
 そこいらをひとまはりして虚子忌暮る 福津 有島 洋子  
 もう聞けぬ花の吉野の師の話 伊賀 永井二紗子  
 ふらここの順番を待つ真つ直ぐな目 郡山 市川 瑞枝  
 花ぼんぼり灯りて人出城下町 四日市 伊藤 和子  
 汀子師のおもかげ花の雲に追ふ 姫路 小林 智子  
 つちふるや遠くて近き戦の火 荒尾 大川内みのる  
 豆飯を炊いて退院待つてをり 豊橋 白井 己童  
 汀子師を偲ぶ三極咲きし杜 長岡 佐藤 文子  
 観覧車花の雲より降りてきし 鳥栖 緒方 輝子  
 朝靄の湖心に向ふ蜷舟 神戸 鴨川加奈子  
 北の地に大志抱きて入学す 白山 中川外代子  
 搗きたての草餅供へ忌明けなる 薩摩川内 向原 宮子

● 持永真理子 選

特選五句

のどけしや猫が爪とぐ理髪店

東京 柿崎典子

カステラに刺す春愁のフォークかな

明石 駿河亜希

囀は空の蒼さの雫かな

大牟田 森永清子

一丁目一番地より地虫出づ

泉大津 多田羅紀子

母の日や母を越えたるためしなし

東京 岡田圭子

二句短評

一句目——昭和の雰囲気が漂う懐かしい理髪店が目につかぶ。猫は爪をとき用意周到だが、店主の方はどうだろうか。俳諧味があり、季節が効果的。

二句目——淡々と詠まれて、どきつとさせられる句である。春愁が何かは分からないが、遣り切れない気持が、フォークに表れている。

山笑ふ熊野古道をうねらせて 和歌山 市瀬 翔子  
 明易や汀子先生いま何処 垂水 山元 通章  
 まつさらな絵本春灯下に開く 諫早 外輪ふみえ  
 一両車ことりと止まり花の駅 岡山 名木田純子  
 昼過ぎて雨になりけり桜餅 西東京 今井 名津  
 春愁や一病増えて飲む薬 宇佐 水野 公明  
 散るさくら光となりて見失ふ 東京 渡辺 光子  
 カステラに刺す春愁のフォークかな 明石 駿河 亜希  
 母が待つただそれだけの帰省かな 東京 鈴木サキ子  
 下山バス待つ間の足湯のどけしや 福岡 工藤 友子  
 よくぞ生きし九十六年山笑ふ 平戸 辻 美彌子  
 クツキーの生地を寝かせる春の昼 鳥取 五百川知子  
 朝散歩新樹の風に真向ひて 大阪 西川寿賀子  
 百年の村の宝や大桜 金沢 辻 美智子  
 音もなく風に遅れて散る桜 さいたま 池澤はるを

入選六十句

焦げ臭き男集團山を焼く 半田 稲葉 京閑

四阿をふくらませたる花見かな 光 田村 文代

しやぼん玉優しき息は真ん丸に 宇部 永田 芳子

たんぼばやぎつしり詰まる陽の匂ひ 神戸 平岡 良一

一片の落花流れに身を委ね 高崎 山内あつ子

諦めし旅ほど恋ふる春の月 太宰府 柴田慧美子

花時といふ狂ほしき二週間 八尾 米澤 悦子

のどけしやお客二人のロープウェイ 福岡 西村 榮子

片隅と云ふ居心地や桜桃忌 熊本 西 美愛子

無為なるは豊かな時間初桜 大牟田 西坂美也子

花の駅巡るローカル線の旅 四國史 豊田 耕造

化粧して女の子男の子も花祭 あわら 木幡 嘉子

一句てふ大きな宇宙春の草 神戸 影山 里風

永き日や半跏解かざる思惟仏 神戸 上岡あきら

急ぐ気のなくて亀鳴く辺りまで 名古屋 幅 みや女

この濠の何処に抜け穴亀の鳴く 鳥取 石尾 正子

珈琲はブラック窓に花辛夷 福岡 津田 富子

朝帰りして恋猫の澄まし顔 神戸 片岡 橙更

春愁の妻が眼鏡を拭いてをり 山口 西 やすのり

虚子祀る親しく虚子と呼び捨てて 吹田 生澤 瑛子

しつとりと湯けむり濡らす春時雨 鳥栖 西山 恵二

うとうととするも養生春炬燵 松山 篠原みどり

母子草日は惜しみなく野辺にあり 鹿児島 所崎 玲子

佇みて風の蝶々消ゆるまで 高松 福家 敬子

人生に卒業といふ通過点 神戸 岩水ひとみ

春服へ旅立つ心納めけり 平川 丹野 慶子

小さき風大きく見せて花吹雪 加古川 岩城 久美

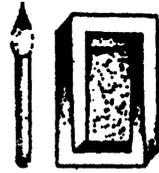
風光る花嫁舟のすべりゆく 大牟田 石橋 武子

空にあを満ちて寺苑に花満ちて 岡山 伴 明子

夕蛙畔に光れる忘れ鎌 鳥取 砂流 育子

また花の哀しさ重ね虚子忌かな 富山 高城 玲子  
 初桜御朱印帳の一ペーシ 福島 遠藤 里乃  
 咲き初めの花に散ること考へず 糸島 占部ゆき江  
 母と云ふ騙され上手四月馬鹿 洲本 高野 さち  
 急がざる歩は囀に案内され 福岡 黒田 純子  
 共に老い共に笑うてホ匂うらら 神戸 小柴 智子  
 囀に背中押されて八合目 市原 飯塚 咲子  
 自づから惚ぶ歩となる花の道 柏原 早川 水鳥  
 ふらここの漕ぎ新しき風を生む 堺 山戸 暁子  
 親猫の視線するどき日のつづく 福岡 吉田 文代  
 ふらここやひとり夜空を揺らしをり 一宮 佐々 房子  
 ふらここの蹴り出す先に迷ひなく 小千谷 大矢あきこ  
 朧夜の風重しとも甘しとも 八尾 窪田由紀子  
 光にも音あるやうに春の川 西宮 山谷 彰子  
 水温み頬に川風来て遊ぶ 松山 平川 白羽

縦横に視線奪つてつばくらめ 糸島 宮脇 睦子  
 朝靄の湖心に向ふ蜺舟 神戸 鴨川加奈子  
 テノールの僧の読経や花の雨 熊本 西村 孝子  
 囀れる地上に何があらうとも 袋井 湖東 紀子  
 一人居の強がりと言ふ四月馬鹿 奈良 河村久美子  
 あの頃はあの頃はとて昭和の日 名古屋 山口こひな  
 風光る若き車掌の指の先 名古屋 宮沢 素流  
 長き尾の今を限りと泳ぐ蝌蚪 東京 甲斐瑠璃子  
 桐の花ま青の空を離さざる 神戸 横山 脩子  
 散るさくら光となりて見失ふ 東京 渡辺 光子  
 残り香のやうな残花の二つ三つ 香川 佐藤美沙子  
 師の逝くやしきりに雉鳴く山家 由布 立川さよ子  
 いま出ます今やりますと言ひ朝寝 恵庭 青山 酔鳴  
 入学式母の視線は我が子のみ 金沢 西田 梅女  
 野仏に手を合はせる児桃の花 倉敷 三木 瑞恵



## 編集後記

光るもの蛍に見えてしまふ闇

汀子

平成元年夏の句です。光るものとは何でしょうか。車のテールランプは車好きの汀子先生を思い出しますし、浮遊する魂だったのかもしれない。

●本誌がお手元に届くころには、第35回通常総会、三年分の協会賞・花鳥詠賞の授賞式、そして稲畑汀子名誉会長追悼会も無事終了している事と思いません。追悼会を開催することで総会の出席者が例年より増え、いつもの会場に加えサテライト会場を設置するなど、新しい試みを企てています。皆様のお力をお借りし、来月号でよいご報告ができますようお願いしております。

なお、追悼会でお配りした「花鳥詠 稲畑汀子特別号」及び、限定販売したクリアファイルおよびポストカードは在庫がある限り販売いたします。ご希望の方は事務局までメールやファックス、おはがきにてお申し込みください。(27ページ参照)

●井上泰至常務理事によるオンライン特別講座「俳句が上手くなる文法講

座」(全二回)の開催がまちか(7月3日(日)、10日(日))です。こちらの報告も来月号のお楽しみに。

●北海道での三年ぶりの全国俳句大会の申込及び募集の締切も7月7日に迫っています。多くの方のご参加、ご投句をお願いいたします。

須川 久

花鳥詠七月号(通巻第四一二期)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇、〇〇〇円

令和四年七月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二二